



Title	ヴュルツブルク訪問記：ゲルハルト・シュウェッペンホイザー氏とトーマス・フリードリヒ氏との鼎談
Author(s)	原, 千史
Citation	形象. 2017, 2, p. 94-99
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/75798">https://doi.org/10.18910/75798</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ヴュルツブルク訪問記

——ゲルハルト・シュヴァッペンホイザー氏と  
トーマス・フリードリヒ氏との鼎談——

原 千史

フランケンの山並みを見晴るかすヴュルツブルク東郊の小高い丘陵上に、ヴュルツブルク＝シュヴァインフルト応用科学大学造形学部はひつそりと立っている。そこから指呼の間にあるヴュルツブルク大学附属図書館の前で待ち合わせをしたのは、夏の終わりのよく晴れた日の午後だった。ジーンズ姿で黒いシャツを着た長身の男性が遠くで手を振っている。隣にもう一人同じくジーンズ姿の男性がいる。初対面ではあるがすぐにそれがシュヴァッペンホイザー氏とその友人であるフリードリヒ氏であることが分かった。簡単な挨拶を交わした後、シュヴァッペンホイザー氏の車に同乗すると、数分で造形学部校舎に到着した。バウハウスを彷彿とさせる校舎はガラスのカーテンウォールにライトグリーンのアクセントが入った瀟洒な建物で、まさにデザイン研究の場に相応しい外観である。二〇〇二年よりここで哲学・美学のほかデザイン理論やメディア論を講じているシュヴァッペンホイザー教

授の研究室に通された私は、几帳面に整理された書棚の前に没後一年半となる氏の父ヘルマン・シュヴァッペンホイザー氏の遺影があるのを目についた。隣接するゼミ室に案内されるとシュヴァッペンホイザー氏が淹れてくれた紅茶を飲みつつ、インタビューが始まつた。シュヴァッペンホイザー氏の経歴についてはすでに本誌第一号で詳しく紹介したが、しかし友人のトーマス・フリードリヒ氏についてはまだ日本では知られていないと思われるので略歴を紹介しておきたい。フリードリヒ氏は一九五九年に生まれ、今回の会談の場となつたヴュルツブルク応用科学大学の前身であるヴュルツブルク専門大学でグラフィックデザインを学んだ。しかし元来実技よりも理論への関心が強く、卒業後はヴュルツブルク大学に進学して哲学・政治学・民俗学を修め、哲学で学位を取得している。その後ヴァイマルのバウハウス大学講師を経て、二〇〇〇年からマンハイム大学造形学部で哲学およびデザイ

ン理論の教授を務めている。シュヴェッペンホイザー氏との共同編集のもと『叢書・美学と文化哲学』を二〇〇一年に刊行して以来、翌二〇〇二年からは『批判理論雑誌』の共同編集者も務め、二〇〇九年にはシュヴェッペンホイザー氏と共に著『形象記号学 *Bildsemantik*』(1版準備中)を出版し、批判理論に連なる仕事をデザイン理論の分野で展開している。

会談は時おり余談も交えながら和やかな雰囲気のもとに行われ、気がつくと三時間を超えていた。二人ともこちらの質問に懇切丁寧に応答してくれたおかげで、学問的刺激と有益な情報に満ちた大変意義のある会談となつた。本稿では、その会談の内容をいくつかの論点に整理して報告することにしたい。

### 一 今日の形象論における批判理論の役割について

シュヴェッペンホイザー氏によれば昨今の形象をめぐる議論は、ドイツではある種のアポリア的状況に陥っているという。つまり、一方では形象をテクストのように読解可能と考える記号学の立場と、また他方では形象は読解されるべきものというよりは経験されるべきものとする現象学的立場とが互いに排斥し合いながら並び立っているというのだ。そうした硬直した状況下にあって批判理論は、まさにこの両者の対立を媒介する重要な役割を果たさうると氏は考える。というのも、早くも一九四〇年代にホルクハイマー／アドルノが『啓蒙の弁証法』の中で「弁証法はあらゆる形象を書 *Schrift* として提示する」と述べているとおり、初期批判理論は読解すべきものとして形象を捉え、ベンヤミンの唱えた「弁証法的形象」に代表される先駆的業績を残しているからである。しかし当時の批判理論には、後に記号学で展開されるような構造主義に基づく練り上げられた理論は欠如していた。フリードリヒ氏の見解によると、記号学では分類を重視する構造主義的方法論が支配的なあまり、弁証法的理論よりもむしろ実証主義的言語学と親和性があり、批判理論が記号学に一定の距離を置いているには理論の核心に根拠があるという。

他方で形象を読解されるべきものとしてではなく、身体的関与を伴つて経験されるべきものとして捉える現象学的形而論とも批判理論は接点をもつ、とシュヴェッペンホイザー氏は考える。初期批判理論では太古の儀式に使われた圧倒する力をもつた形象がその後も引き継がれて、現代の文化産業に

おいてメディアが放つ圧倒的な形象に至っていることが批判的に叙述されている。現に在る世界を模写することで現状を過度に強調する模像としての形象をイデオロギーとして斥ける一方で、よりよき世界の形象を安易に描くことも拒んだのがアドルノであった。ユートピアと形象をめぐるエルンスト・ブロッホとの議論でもアドルノはその立場を貫いている。フリードリヒ氏はフッサーール最晩年の著書『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』に言及し、そこで展開された身体を中心とした生活世界における経験概念に着目する。それを受けてシュヴェッペンホイザー氏も、いわゆる『危機書』は、ホルクハイマー／アドルノらもその学問批判的内容を高く評価し、特に十九世紀末から二十世紀初頭にかけての『認識』のパラダイムから『経験』のパラダイムへの転換を捉えた点に深く影響を受けており、初期批判理論の形成期において現象学的学問環境が果たした役割は少なくないという。シュヴェッペンホイザー氏の考えによれば、形象は読解されるべき記号として認識に関与する一方で、世界を経験するメーディウムとしても重要な役割を果たしている。『認識』と『経験』といういずれの契機をも含んだ弁証法的形象概念を批判理論はその初期より用いているがゆえにこそ、冒頭で述べた

形象をめぐる議論のアポリア的状況を打破する重要な役割を果たし得ることをシュヴェッペンホイザー氏は強調する。

## 二、視覚コミュニケーションの批判的解釈学の構築に向けて

次に、今日の批判理論が形象論において具体的にいかなる寄与を行っているかについて質疑が交わされた。フリードリヒ氏は一九七〇年代に独仏で盛んに議論された記号学をイデオロギー批判と捉える論争に批判理論が積極的に関与しなかつたことに触れ、そもそもロラン・バートが五〇年代から六〇年代にかけて行った日常の神話作用からマス・メディア分析に至る数々のイデオロギー批判について、当時存命中のアドルノは知りうる可能性があつたにもかかわらず、言及すらしなかつた事実を指摘する。これを受けてシュヴェッペンホイザー氏は、精神分析を言語分析と考えるフランクフルト大学の精神分析学者で、ハーバーマスとも親交のあつたアルフレード・ローレンツァー（一九二二～二〇〇二）あたりから言語学および記号学と批判理論との接点が見出されるという。その後の批判理論の展開において特に注目すべき貢献を

行つてきたのが『アドルノ伝』の著者として知られるシュテファン・ミュラーードーム（一九四二～）である。彼はオルデンブルク大学を拠点にしてハーバマスに定位しつつ批判理論と構造主義的記号学とを接続する研究をとりわけ九〇年代以降行つており、その論文「視覚的理説—文化社会学的形象解釈学の構想」（一九九五）はその後の〈視覚コミュニケーションの批判的解釈学〉につながる重要な理論的著作であり、それに先立つ共著「寝室が記号として示すもの—宣伝メディアにおける寝室文化に関するテクストおよび形象分析」（一九九二）は、寝室を例にとって宣伝メディアが制作したイメージやテクストを記号学も援用して多角的に分析しており、〈視覚コミュニケーションの批判的解釈学〉の初期の良き実践例ともなつていて、シユヴェッペンホイザー氏は語る。それと関連して批判理論とは直接的結びつきはないと前置きした上で氏は、興味深いメディア社会学者としてウルリヒ・エーヴァーマン（一九四〇～）の名を挙げる。〈客観的解釈学〉の名の下にエーヴァーマンは、例えばテレビのドラマシリーズを取り上げて社会的メンタリティーがメディアのもたらすイメージによつていかに影響を被つているかを分析するなど、〈視覚コミュニケーションの批判的解釈学〉にとつ

ても重要な寄与を行つてゐるといふ。またさらに、批判理論につながる精神分析学者でもあるハンス＝ディーター・ケーニッヒにも言及する。批判理論を継承する哲学者でホルクハマー全集の編者で知られるグント・エリン・シュミット・ネルの友人でもあるケーニッヒは、「氷の微笑」と性の闘争（一九九五）において〈客観的解釈学〉を応用してハリウッド映画『氷の微笑』を内容と形式の両面にわたつてスリリングに分析しており、〈批判的解釈学〉にとつても模範となる仕事をしているといふ。

次にこれまでさほど注目されてこなかつたが形象に関する重要な理論家としてぜひとも紹介しておきたいと、シュヴェッペンホイザー氏自らが進んで言及したのが、クリストフ・テュルケ（一九四八～）である。テュルケは二〇〇〇年以降、批判理論に依拠しながらもメディア論や文化論において独自の学説を展開してゐる。イメージを多用した文体はニーチェを彷彿とさせるところがあり、翻訳が難しいという。三部作と言われる著書「興奮した社会 *Erregte Gesellschaft*」（一九九〇）、「カインのしるしから遺伝情報へ *Vom Kainischen zum genetischen Code*」（一九九〇五）、「夢の哲学 *Philosophie des Traums*」（一九九〇八）があり、文化の原初にある

葛藤に着目してテュルケは「文化は形象によるショックとともに始まる」という基本テーマを立てる。ベンヤミンがその映画論において映画のイメージによるショック効果に現実破壊と現実からの解放を期待したことに対し、テュルケはアドルノと同じ立場に立つて批判を加え、形象のショック効果は解放ではなくしてむしろ支配体制の強化につながると考える。そこでテュルケは太古において自然の猛威を鎮める物として人間が自己保存のために考案した〈犠牲 Opfer〉に着目する。犠牲を献げるという行為において人間は暴力をふるう自然と同一化し、暴力を模倣反復することで自然の猛威を鎮め自己保存を図ってきた。そしてその犠牲は今なお文化産業における暴力の模倣という形で継続しているという。テュルケは犠牲の理論においてフロイトの抑圧理論、とりわけ反復强迫の概念を援用して、トラウマを繰りかえし喚起することで鎮静させてゆくその役割は今日では文化産業メディアが担っているとして、文化を発生論的に暴力に起因するものと考える独自の文化理論を唱えている。批判理論に定位しながらもハーバーマスには忌憚なく批判を加える、シュヴェッペンホイザー氏の言葉を借りれば、「異端の批判理論家」であり、その文体と相俟つて異彩を放っているという。その後も現在

活躍している、批判理論に拠りつつ形象を論じている理論家たち、例えばゲルトルート・コッホなどについても意見を交わした。

ここで、それまでの会談において度々話題に上った解釈学の果たす役割について問うたところ、形象をめぐる議論において解釈学は形象を読解して意味の層を明るみに出すための方法としてのみ要請されているのであり、特定の学派に関わる狭義での解釈学を意図しているわけではないとシュヴェッペンホイザー氏は明言し、形象学はコミュニケーション学の一分野でもあり、より差異化された新たなコミュニケーション概念を創造していく上でも解釈学は必要不可欠な手段になるという。

三・今後の形象をめぐる研究の指向性について

今回の会談を締めくくるにあたって、シュヴェッペンホイザー氏が今後、形象に関するいかなる研究を進めていく予定であるかを質問した。比較的近年に形象に関するまとまつた論集『形象の障害と反省 Bildstörung und Reflexion —— 視覚文化

の批判理論に関する研究』(二〇一三)を上梓したばかりの氏が次に企図しているのは、新たに登場した電子メディアによる〈デジタル形象の批判理論〉である。その準備段階として先ずはアドルノら初期批判理論の遺したメディア論を一度丹念に再検討し、現代の電子メディアについての批判理論の構築に活かせるところは活かしていきたいという。テュルケが『興奮した社会』で部分的にはあるが展開している現代メディア批判も参考にはするが、そこでは新たな電子メディアに対するしさか懷疑主義的で保守的なトーンが前面に出すぎているとのことである。シユヴェッペンホイザー氏が新たな電子メディアにおいて重視するのは、デジタル形象に内在する根本的な矛盾、すなわちその集団的生産と個人的取り込み(Aneignung)との非対称的でアンヴィヴィアレントな関係である。メディアにおいて集団的労働により生産されるデジタル形象が、個人のレベルで受容されることにより社会はいかなる変容を被ることになるのかと言い換えてよい。そこでは公共圏の新たな構造転換が出来しつつあり、私的領域と公的領域との対立軸はもはやばやけて時代遅れになりつつあるという。グローバルなハイテク資本主義を背景としたこうした社会変容のプロセスを分析する際には、形象論

的側面とテクスト論的側面の両者がともに重要であり、全てを還元主義的に形象的側面だけに関係づけるのは単純化しきることになると注意を喚起する。理論面では形象をめぐる学問的議論において批判理論の関与を現在以上に深めつつも、実践面では解釈学を始めとして他の方法も折衷して実際のデジタル形象の分析に当たる両面作戦を展開していく所存であるという。続いてフリードリヒ氏がシユヴェッペンホイザー氏の考えを敷衍する形で発言し、今日の電子メディアによるデジタル形象では文化の作り手と受け手の境界が曖昧となり、かつての少数の作り手と多数の受け手という関係から多数の作り手と多数の受け手という関係に変容しており、市民社会の中心的カタゴリーであつた作者の自律性そのものが薄れてきているという。それはシユヴェッペンホイザー氏も言うように、かつての社会主義が掲げた理念、つまり生産者である労働者が生産の主体になるという理念の部分的実現とも言えるが、実際には社会的自律を伴わない皮肉なカリカルニアにすぎない。そして最後にシユヴェッペンホイザー氏は、今後もイメージ現象を解明し理解することで、現代社会の変貌のプロセスを把握していきたいという抱負を述べて会談を締めくくった。